

II 実 践

<実践例 1> 第1学年 平成29年10月

(大 隅 一 浩)

I 単 元 アジア州～人口増加と経済発展に注目して～

II 目 標

1. アジア州の各地域において多様な人口増加と経済発展が見られることへの関心を高め、より自動車の生産拡大が見込める国がどこであるかを意欲的に考察しようとしている。
(社会的な事象に対する関心・意欲・態度)
2. 生産性や市場確保などの多様な観点から各国の地域的特色を比較することを通して、より自動車の生産拡大が見込める海外進出先を、根拠と理由付けを示しながら説明することができる。
(社会的な思考・判断・表現)
3. より自動車の生産拡大が見込めることを示す根拠を、地勢図、主題図、統計資料、グラフ等の資料から抽出することができる。
(資料活用の技能)
4. アジア州の各地域の自然環境や人口の変化、経済状況や社会状況などの特色を説明することができる。
(社会的な事象についての知識・理解)

III 指導にあたって

1. 生徒観

本年度の第1学年の生徒はこれまで、教科で重視して育てる資質・能力「扱う問題に対する見方が自分と異なる人々の意見に共感できる」ことを大切にし、社会的な事象を多角的に捉える学習を行ってきた。例えば、地理的分野「世界の人々の生活と環境」の単元では、マレーシアからの留学生との交流を通して、相手の宗教や立場を理解し自分たちができることを考える生徒が多く見られた。小グループでの活動からも、自分と異なる考えを持つ他者と積極的に関わり、相手の意見にうなずいたり、考えを受け止めようとしたりする姿が見られた。

また、教科で重視して育てる資質・能力「問題に関連する情報を選び出し、提案された解決策と論理的に結び付ける」力を高めるために、トゥールミン・モデルを活用し、根拠・理由付けと結論とを書き分けて、論理的な意見を構築する学習や、討論形式で意見を発表し合って判断を下す学習などを行ってきた。しかし、歴史的分野において「聖徳太子はなぜ天皇にならなかったのか？」という課題を追究した際、資料の記述(根拠)をそのまま抜き出しただけで理由付けがない答えや、根拠を示さずに理由付けしかない答えが半数見られた。また、「古代中国の権力者だったら、他国に攻めるべきか、自国を守るべきか？」という議題で話し合いを行った際には、判断基準が互いの立場で異なり、自分の考えを述べ合うだけで、思考の深まりや広がりが見られなかった。

以上のような現状を踏まえて、トゥールミン・モデルを引き続き活用し根拠と理由付けを区別して結論を出す活動や、判断基準を明示して活用させる活動などを行う必要がある。

2. 教材観

アジア州の地域的特色は、他の州に比べて人口が多く人口密度も高いことである。アジア州に人口が多い理由として、農作物の栽培に適した地形や気候であること、緑の革命によって食料供給量が増加したこと、急速な工業化により就業機会が増加したこと、医療技術と衛生環境の向上により出生率が比較的高いまま死亡率が低下したことなどが挙げられる。人口増加に関する各国の状況は、その国の経済発展と結び付き非常に多様である。例えば、中国やインドでは食料不足対策として人口抑制政策が採られたが、マレーシアでは労働力確保のため人口増加政策が採られている。また、人口増加率が高い東南アジアと西アジアを比べても、マレーシアは自然増によるところが大きく、サウジアラビアは外国人労働者の移民という社会増によるところ大きい。さらに、人口ボーナスと人口オナーズの影響により、企業の海外進出先が中国から東南アジアや南アジアに移り変わりつつある。このように、人口増加と経済発展の視点からアジア州を見ていくことで、各地域の自然環境や人口の変化、経済状況や社会状況などの特色を明らかにすることができる。アジア州の地域的特色を明らかにすることで、日本が人口減少社会へと突入していることや、日本が今後も経済発展を続けていくためにはアジア州との連携が必要であることなどの認識を深めていけるようになると思う。さらに、経済格差や環境問題など、人口増加と経済発展によって引き起こされる様々な地球的課題について関心を持つことは、持続可能な社会づくりに参画しようとする意識の向上につながると期待している。

3. 指導観 ～目指す生徒の姿に近付けるために～

本単元での授業における、資質・能力を発揮している生徒の姿を、以下のように考えている。

生産性や市場確保などの多様な観点からアジア州の各地域的特色を比較し、より生産拡大が見込める自動車工場の海外進出先を、根拠と理由付けを示しながら説明している。

(1) 本単元で付けさせたい資質・能力

本単元では、社会科で育てる資質・能力のうち、特に「問題に関連する情報を選び出し、提案された解決策と論理的に結び付ける」力を身に付けさせたい。そのために、「中国、マレーシア、インド、サウジアラビアのどの国に自動車工場を進出させるかランキングしよう」という学習課題を、単元を貫く課題として設定する。進出先を決定するための根拠とする「問題に関連する情報」を得るために、人口増加と経済発展の視点から、アジア州の各地域の自然環境や人口の変化、経済状況や社会状況などの特色を明らかにしていく。また、「提案された解決策と論理的に結び付ける」ために、生産性（生産の三要素である自然・労働・資本があるか）、市場の確保や今後の動向、競合関係（市場占有率）、環境負荷などの判断基準を、生徒の意見の中から見だし、概念化して明示する。判断基準に照らし合わせ、地域的特色から必要な情報を選び出し、根拠と理由付けを示して妥当性の高い優先順位を決定する姿が見られるようにしていきたい。そして、判断基準を明示し活用させることを通して妥当性の高い結論を導き出す力は、特に全教科共通で重視して育む資質・能力のうち「場に応じて判断基準をつくる力」を伸ばすことにつながると考える。

生徒たちは、自分の所属する様々な社会集団において、個人や集団として意思決定を迫られる場面に必ず出会う。少なくとも5年後には、選挙権を獲得し投票行動が可能となり、国政に関わる意思決定を行う機会が訪れる。本単元の学習を通して、よりよい社会を形成していくために、判断基準に照らし合わせて必要な情報を抽出し、根拠と理由付けを示しながら妥当性の高い結論を導き出すことができるようになることを期待している。

(2) 留意点

学習を進めるに当たり、特に以下の点に留意する。

- ・学習への関心を高め、意欲的に課題追究を行わせるために、以下のような文脈での問題状況を設定する。

あなたは、ある自動車会社の社員です。今後、新たに工場を海外進出させることが決まりました。候補地は、中国、マレーシア、インド、サウジアラビアです。あなたは社長から、各国の状況を調査し、候補地の優先順位を考えるよう命じられました。その優先順位にした根拠と理由付けを明確にし、プレゼンテーションできるようにしましょう。

- ・様々な地域的特色から根拠を選び出しやすくさせるために、車種の概要を提示する。また、異なる視点から地域的特色を選び出させるために、車種を軽自動車、高級車、EV、SUVの4種類を設定し、小グループ毎に異なる車種の進出先を検討させる。
- ・単元を貫く学習課題と毎時間の学習とのつながりを自覚させるために、毎時間の終末に「進出先として考えたとき、プラスになりそうなものとマイナスになりそうなもの」を考えさせる。進出先の優先順位を決定する話し合いにおいて、これまで学習したワークシートから根拠を探し、優先順位を説明している姿が見られるようにしたい。
- ・単元の初めに立てた予想と、最終的な結論とを比較させることを通して、妥当性が高まったと言える点を指摘させ、その理由を考えさせる。この振り返りを通して、多角的に考察したり、根拠と理由付けを示して結論を述べたりする必要性に気付かせていきたい。

IV 学習計画（8時間計画）

★特に本単元での授業における資質・能力の発揮につながる姿とそのための手立て

学習活動（時数）	目指す生徒の姿（観点）	教師の手立て
1. アジア州の地形や気候を概観し、地域的特色を捉える。（1）	・アジア州の地域的特色を捉え、なぜそのような特色が現れるのかを考えている。（関・技）	・アジア州の地域的特色を捉えさせるために、人口に関する資料を用意する。
2. 日本が抱える人口問題に気付き、学習課題に対する予想を立てる。（1）	★日本企業が海外進出する必要性に気付き、進出先の優先順位を決定している。（関・思）	★意欲的に課題追究させるために、現実的な課題を解決する文脈を提示する。
3. アジア州を東アジア・東南アジア・南アジア・西、中央アジアに分け、候補地とした国を例に、地域的特色が見られる理由や影響を、人口増加と経済発展に注目して調べる。（4）	・各国の地域的特色を明らかにし、学習課題に必要な情報を選び出している。（資・知） 「中国沿岸部に人口が集中しているのはなぜか。」「周辺国に比べマレーシアの人口増加率が高いのはなぜか。」「インドが中国を追い抜き人口が増加するのはなぜか。」「周辺国に比べサウジアラビアの人口増加率が高いのはなぜか。」	・情報を選び出しやすくさせるために、ウェビングマップにまとめさせる。 ★単元を貫く学習課題と毎時間の学習とのつながりを自覚させるために、進出先として考えたときプラスやマイナスになりそうなものを考えさせる。
4. どの国に自動車工場を進出させるかランキングする。（本時1／2）	★各国の地域的特色を比較し、より生産拡大が見込める進出先を、根拠と理由付けを示して説明している。	★結論の妥当性を高めるために、多様な判断基準を概念化して提示し、活用させる。

V 本時の学習

1. 目標

各国の自然環境や人口の変化、経済状況や社会状況などの特色を踏まえ、多様な判断基準を設定して、自動車工場の海外進出先の優先順位を決定している。

2. 過程

学習活動【学習形態】	目指す生徒の姿	教師の手立て
課題 中国、マレーシア、インド、サウジアラビアのどの国に自動車工場を進出させるかランキングしよう。		
1. 学習課題と本時の流れを確認する。 【全体】	・本時の活動の見通しを持っている。	・見通しを持たせるために、本時の学習活動の流れを示す。
2. 車種毎に優先順位を話し合い、ランキングに表す。 【個→小グループ】	・根拠と理由付けを示して、海外進出先の優先順位を説明している。	・根拠と理由付けを区別させるため、机間指導でワークシートの記述内容を確認する。
3. 同じ車種を担当した小グループ同士で交流する。 【小グループ】	・互いのランキングを比較検討し、妥当性の高さを判定している。	・妥当性を高めさせるために、同じ判断基準で順位を付けているか、多様な判断基準を設定しているか確認させる。
4. もとの小グループに戻り、ランキングを決定する。 【小グループ】	・根拠と理由付けを示して、妥当性の高い優先順位を説明している。	・優先順位を決めやすくさせるために、生徒が考えた判断基準を発表させ、判断基準を明確化させて概念化する。
<p><重点を置いた社会科の資質・能力を發揮している姿></p> <p>★生産の三要素（自然・労働・資本）、市場の確保や動向、競合関係（市場占有率、シェア）、環境負荷などの判断基準から、アジア州の自然環境や人口の変化、経済状況や社会状況などの特色を比較し、優先順位を説明している。 （例）高級車の進出先には富裕層が多く市場が大きい中国がいいと言っていたけど、中国は環境問題が深刻でEV車が注目されているから安定した市場が確保できないと思うよ。サウジアラビアなら、富裕層の割合が高く、進出している自動車工場も少ない。競争相手が少なければ、安定した市場が見込めるから、優先順位が高いと思う。</p>		<p>★概念化された判断基準を活用させるために、生徒が優先順位を説明する様子を机間指導で確認し、足りないところを指摘する。</p> <p>・判断基準への意識を高めさせるために、今後、どのような資料（根拠）があればよいかを考えさせ、発表させる。</p>
5. 本時の学習を振り返る。 【個】	・本時の活動を振り返り、判断基準の必要性に気付いている。	

3. 評価とその方法

各国の自然環境や人口の変化、経済状況や社会状況などの特色を踏まえ、多様な判断基準を設定して、自動車工場の海外進出先の優先順位を決定しているかを、活動2・3・4の話し合いの様子やワークシートの記述内容から評価する。

最終的に生徒が考えた進出先
1位 中国にEV車 15
2位 インドに軽 6
他は、1か2で分かれた。

VI 成果と課題

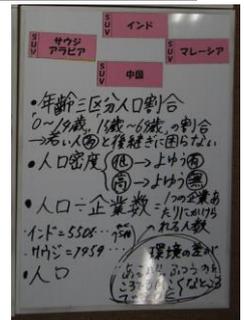
実践を通しての成果（○）と課題（▲）は以下の通りである。

- 結論を出す際に根拠と理由付けを示すことで説得力が生まれることや、複数の根拠を比較検討することで説得力が増すことを実感した生徒が多かった。また、これまでの学習を振り返り、その国の状況を様々な視点で捉えようとする姿勢が見られた。

最初は「1人あたりの国民総所得」を中心にして考えていたけれど、「気候帯」のことも考えるとまた違う国がいいと思うようになり、色々な視点から見て判断することが大切だと思った。

毎時間の最後に、進出先になったときプラスやマイナスになりそうな情報を考えさせたことで、次の2つの効果があった。①各時間の学びを学習課題と結び付けられた。②本時の学習でこれまでの学習プリントを見返し根拠となる情報を探していた。生徒は、地域的特色という知識が進出先を決定する根拠として活用できることを実感できたのではないかと考える。

- 自分の考えでランキングを作成した後、グループで結論を導くようにしたことで、他者の異なる視点への気付きや対話を通して自身の結論がより妥当性の高いものへと変容したことを実感した生徒が見られた。



最初、私は女性が運転できるようになったサウジアラビアを1位にしていた。でも、班で話し合ってみると、宗教のことを考えるとあまり向いていないかもしれないと分かったので、様々な視点で考えることが大切だと思った。

話し合いでは、妥当性を高めるために他の資料を探そうとする姿も見られ、解決のために見通しを持って情報を選択しようとする態度が培われた。しかし、例えばEV車に関しては1位が中国進出に偏り、グループ内で違いが出ない場合もあった。異なる視点や考えをどうすれば得られるか授業の中で見極め、交流のさせ方を柔軟に変えていく必要がある。

- ▲1つの正解がない探究型の授業においては、結論の妥当性を高めるための基盤となる知識と資料の質や量が重要となる。どのような資料を提示し学習を進めるのか、本時でさらにもどのような資料を提示するのか検討が必要である。また、「企業」が工場を進出させるという文脈において、「利潤の追求」という目的を生徒が認識し切れていなかった点に課題が残った。そのため、車種の特徴とその国の地域的特色が合致するものを探す活動になってしまったり、根拠に深まりが生まれず結論に至ったりする状況も見られた。設定する文脈に生徒が入り込むことで、主体的に活動し、対話を通して妥当性を高めようとするのではないかと考える。実際の場面に近づくよう、例えば「判断基準」が何かを立ち止まって全体で考えるなど、教師のコーディネート力やより生徒の立場や考えに沿った手立ての準備が必要である。

私は最近のニュースの記事や二酸化炭素の排出量などで進出先を決めてしまって、一人あたりの国民総所得とか車を買ってもらえる確率などは全然考えていなかった。だけど、そういうものも必要だということが分かった。

- ▲グループ活動では、グループや個人の到達度に差が生まれる。教師が評価規準を明確に持ち、授業の様子やワークシートの内容から一人一人の学びをみとれるようにする必要がある。また、自分の学びを自覚するうえで振り返りは重要である。対話を通して自分たちでどのような判断基準を設定できたのかを振り返り、再び生徒に返すことで、学びの汎用性を高めることができるのではないかと考える。